

---

# 精霊見聞録

ニラ御坊

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

精霊見聞録

### 【Nコード】

N3482E

### 【作者名】

ニラ御坊

### 【あらすじ】

時は平安。妖怪がはびこり、乱世を極めていた。そして時は流れ、22世紀。資源の尽きた人類がとった道。『精霊と同盟』。そんな世に2人の男が時を超えてくる。2人が来た日本には再び妖怪が世を占めようとしていた……活躍する名は……《退魔士・紅連》

## プロローグ（前書き）

えゝ、ご無沙汰してますニラ御坊です。新年度になり忙しく、ようやく落ち着いてきたので執筆再開しようと思いましたが、何を思ったか新連載です（汗）

こっちはあまりギャグ要素を含まない真面目な路線でいきたいと思っています。

もう一本も暇を見つけては更新しますのでよろしくお願いします。

## プロローグ

草木も眠る丑三つ時。

闇の中では対峙する2つの影と何度となくと交錯される光があった。

声変わりしたことが分かる声が辺りに響く。

「ぬえ」！　もう終わりだ！！」

一際大きな赤い光が発光した。

今度は鋭く冷たい、まるで全てを見透かすかのような声が響く。

「紅連”よ。あいにくだが私はここで終わるわけにはいかない。まだやり残したことがあるのでな。

それよりも貴様の力の片鱗を見せてもらっぞ……！！」

黒色……というのだろうか？

憎悪すら感じさせる色の光が辺りを覆い尽くした。

「ウオアアアア！」

先に喋った方の男が苦悶の悲鳴をあげる。

ドクン。ドクン。

まるで心臓のような音が辺りにこだました。

規則的に聞こえるそれは徐々にその周期を速めていく。

一際大きく鼓動した時、1つの影に異変が生じた。

影が大きくなっていく。

そして3 mに達したであろうかという程大きくなった時、それは吠えた。

大気をも揺るがす声が響く。

「ほう。」

これが貴様の力か。

なるほど、さすがにてこずりそうだ」

その時、まるで衣を裂くような音が2人を支配した。

「あまりの力に時空間が裂けたか……　これ以上用はないな」

1つの影が消えた。

もう1つの大きな影は激しく吠えたが、出来た時空の裂け目に飲み込まれた。影が飲み込まれた後、辺りは静寂に満ちた。

\*\*\*\*\*

「えー、このように、人類は2068年に全ての資源が尽きる前に地球を捨て、火星に移民する計画がなされていた中、アフリカのフロウ博士がアマゾンの奥地にて精霊を発見。

そのまま精霊達との同盟に成功し、現在に至るわけです」

京都宇治川区の学校で教師と思われる壮年の男性が等間隔に置かれた生徒の机の間をゆっくりと移動しながら歴史を語っている。

それを窓際が一番後ろというサボるための特等席のような場所で我関せずと言った風情で頬杖をつきながら空を見上げている女生徒がいた。

ぱちつとした目にスツと筋の通った鼻。

金色の髪は肩までのばされている。

この学校、『精霊学園 京都分校』の制服を来ていた。  
白を基調としたブラウスに栗色のスカートを膝より2センチほど  
あげている。

「高神、たかがみこと高神尊！」

上の空の女生徒、尊を見かねた教師が呼びかける。

「はい」

高い声で気の抜けた返事をする。

「集中しろ。」

「ここ、テストに出るぞ」

呆れたように尊をたしなめる教師。

「えー、そして2074年。」

同盟反対派だった精霊達が反乱を起こします。  
ですが、それは1人の男と同盟派の精霊達により鎮圧。  
翌年には1000人の志願兵により『精霊隊』が発足されました。  
これが今から約30年前の出来事であり……」

その後も教師の話は続いたが、窓から入ってくる春の爽やかな風  
も手伝い、尊は自ら意識を手放した。

\*\*\*\*\*

時間は過ぎ、放課後。

校舎には夕日が映えて光っている。

グラウンドでは所狭しといった感じで運動部が、校舎内では至る所で吹奏楽部が練習をしている。

尊はというと特にすることもなく家路につこうとしていた。

「尊ー！」

今度の大会1人足りないんだー！

だから手伝ってよー」

体育館の割り当て外の日なので外で練習していたバレー部の1人から声がかかる。

「わかったー！！！」

特に考えることもなく返事をする尊。

「尊ー！」

今度ダブルスでペアの子が怪我しちゃって、絶対負けたくないから手伝ってー！！！」

今度はテニスコートから声がかかる。

「わかったー！！！」

またも軽い返事をかえす尊。

そう、特にすることないというより、することが1つに定まらないから特定の部活に所属しないのだ。

そして、たまにかかる誘いの声に応えては、チームの活躍に貢献しているのである。

尊の家は歩いて10分。

校門を出て、大通りをずっと歩き、2つの角を過ぎ商店街を通り

抜けた所にある。

家自体はなんということのない一軒家だ。

「ただいまー」

入ってすぐ右にある階段を上り2つ目の部屋が尊の部屋だ。

ドアノブに手をかけ、中に入る。

いつも通りの部屋だ。

窓の近くにはベッドがあり枕元には携帯電話の充電器。

反対側には勉強机と本棚が。

本棚には『上級精霊図鑑』『サラマンダーの上手な扱い方』e t c  
そういつも通りだ。

ただ1つ、部屋の中央にいるマントを羽織った青年がポツンと所在なさげにしていることを除いては……

「えーと……」

とりあえず色々聞きたいけどまずは」

日も暮れようかという時刻に悲鳴が響き渡った。



## 第1話

ひとしきり悲鳴をあげた後、事情を聞いてきた母をどうにかごまかす。

そして小さな机を部屋の中央に置いて向き合う。

男はというと、最初の悲鳴に面食らって呆然としていたが向き合った今は落ち着いてこちらを見ている。

赤色の髪を短めに切り、襟足が少し長い。

顔は中性的だが女らしいとかなよなよした印象はなく、その紅い瞳からは強い意志が感じられる。

「で、あんたは何者なのよ？」

刑事よろしく机を強く叩き、ズイと顔を近づけ聴く。

男は落ち着き、男性にしては少し高めの、だが声変わったことが分かる声で答える。

「え〜と、俺は紅連。  
退魔士だ。」

お前こそ誰だ？

そしてここは……？」

えらそうに返してくる青年、紅連に若干イラついた尊だが冷静に応じた。

「私は尊。」

そしてここは私の部屋よ」

その答えにまた紅連は首を傾げた。

「おかしい。

俺は“ぬえ”と戦っていたはず……」

言葉の中に出てきた“ぬえ”という単語と戦うという動詞に対して尊は違和感を覚えた。

（実は精神異常者ってオチじゃないわよね？）

男の身なりについても異常だと思える箇所がいくつかあった。

ズタズタになったシャツやズボンに対し、特徴的な紅いマントは傷1つついていないのだ。

マントより気になったのは何故こんなにズタズタになっているのか？ である。

「ただの泥棒ってわけでもなさそうね……

紅連、あんたはどこから来たの？」

こう聴いた時点で尊はある1つの予想をしていた。  
自分でも信じられない予想だが……

「俺は自分でも信じられないのだが……おそらく違う時代から来たのだと思う。俺のいた時代は承和や天安と呼んでいたが……」

尊は本棚の本の1つ『歴史を知ろう！』を取り出し、パラパラとめくる。

あるページで尊のめくる手はピタッと止まった。

顔には驚愕の表情が浮かんでいる。

「ウソ……でしょ？ それって平安時代の元号じゃない」

尊の予想、“目の前の男は別の時代から来た”というありえない予想は当たった。

尊はまず必死に事態を受け止めた。

「オーケー。」

あんたが過去から来たってのは認める。

泥棒じゃないってことも」

それを聞いてきょんとしていた紅連は頷いた。

「わかってもらえてよかった」

「で、あんたどうするつもり？

当然帰る場所はない。

身寄りもない」

紅連は少し考え、思いついたように顔を輝かせた。

「ここに住ましてくれ」

ある程度その提案を予想していた尊だが、やはりめまいを覚えた。

「あんたねえ。」

仮にも年頃の男女が1つ屋根の下……うつん、同じ部屋で住めると思ってるの？」

さすがに得体の知れない男を部屋に置くほど尊はお人好しではない。

「なら、寝るときは屋根にでも行くから。  
お願いだ」

姿勢を直し、丁寧に頭を下げる紅連。 尊は1つ疑問を覚えた。

「あんたなんでそんなに適応早いの？  
私でもまだ戸惑っているのに……」

「俺は退魔士だから、あらゆる状況にすぐ対応できるように訓練されているんだ」

紅連の言葉を聞き、また新たな疑問がわく。

「さつきも出てきけどたその退魔士って何？」

紅連は眉をひそめた。

「退魔士を知らないのか……？」

まるで知っているのが当然といった感じだ。

「知らないわよ」

無知に思われたことにへそを曲げ、ぶっきらぼうに答える。

「退魔士とは世にはびこる妖怪を倒す者達のことだ」

今度は尊が眉をひそめる。

「退魔士なんて今の世の中いないわよ？ まして妖怪なんて……」

紅連は目を見開く。

「なんだって？

じゃあ……いや、なんでもない。

そうなのか。

道理で妖気を感じなかったわけだ」

紅連はしきりに頷き1人納得する。

「そういうこと。

さて、長々と話したわね。

聞きたいことはまだあるけどとりあえず夕飯の後ね」

気づけば窓から見える外の景色はすっかり日が落ち、暗闇が支配している。

「絶対に物音をたてたらダメだからね」

心配を消して下に降りようとドアノブに手をかけた時、地鳴りのような音が尊の後ろから聞こえた。

「ぐ〜れ〜ん〜？」

早速約束を破った紅連を睨む尊。

「わ、悪い。

腹が……昨日から何も食べてないんだ」

申し訳なさそうに言う。

尊はため息をつき、

「わかった。」

食べ物持ってきてあげるからおとなしくしてて」

尊はドアを開け下に降りた。

\*\*\*\*\*

尊は自分の部屋で卵を割り、熱々のご飯にかけ、醤油をたらす。俗に言う卵かけご飯を作りながらむすつとふくれていた。

「最悪。」

まさか私の分まで食べちゃうなんて」

母親に隠れ２人分の食事を持ってきた尊だったが、部屋に入り机に置いた瞬間、皿という皿から料理が消えていた。

もちろん紅連が食べたからである。

尊の分まで……

だから仕方なく尊はこうして卵かけご飯をシャバシャバと掻き込んでいるのだ。

「あの……その……悪かったって。」

あまりにも腹が減ってたからつい」

尊は必死に弁明する紅連を目の端で捉えながら卵かけご飯を完食した。

「もういいよ。」

特にお腹空いてたわけでもないし……

今日は私の好きな唐揚げだったのになあ」

言葉とは裏腹にまだ紅連を許していないようである。  
痛烈な皮肉が紅連の心に確実に突き刺さる。

「ごめんなさい……」

まるで悪戯をしてバレた子供のようにな目遣いでチラチラとこちらを見る。

その態度が尊の母性本能をくすぐったのだろうか？  
優しく言った。

「本当に怒ってないわよ？  
ただ私の夕食がなくなっただけなんだから」

……どうやらまだ機嫌は治っていないらしい。  
紅連は小さくなるばかり。  
さすがに見かねたのか尊も許す。

「ごめんごめん。  
今度こそ怒ってないから。  
ほら、さっきの続き、平安時代ってどんなだったの？」

紅連は恐る恐る顔をあげ、尊の顔に怒りがないと判断して安堵のため息をもらす。  
そして言った。

「平安時代は妖怪が普通に出る危ない時代だったんだ。  
日が落ちたら家にこもらないと死ぬってくらいに。  
でもそんな中で1人の人間が特異な才能を持つ人間達を集め組織を作ったんだ。」

それが退魔士の始まり」

「それで？」

頷きながら先を促す尊。

「それで都内は一応安定したんだけど、妖怪は次から次に襲いかかってくる。

後手にまわってばかりいられないと判断した俺達は妖怪の親玉を倒すことに専念した。

その妖怪が“ぬえ”ってわけ。

で、妖怪を各地で追い詰めて俺も“ぬえ”を追い詰めた。それからの記憶はあまりなくて、“ぬえ”の攻撃を受けたと思ったらここにいたんだ」

事の全容を聞き終えた尊は腕を組みしばらく考えた。

「つまり、その親玉と戦っているうちに未来に飛ばされたってわけね。

理由も分からない、と」

「面目ない」

再びしよげる紅連。

だが尊は大して悩む様子もなく言う。

「まあなんとかなるでしょ！

今は分からないかもしれないけどその内精霊隊の人らも気づくだろうし。

あそこ、たしか時空について研究してる最中らしいから」



しよげていた紅連は精霊隊という言葉に反応した。

「何？」

精霊隊って」

「ああ、うーん……紅連達でいう退魔士みたいなもんよ。  
取り締まるのは人間や精霊だけだね」

紅連はまだ納得しない様子で、

「精霊……？」

「精霊っていうのはこれ。

出てきて、スパク」

尊が声をかけたコンセントから黄色い小人が出てきた。

「なんだそれ？」

小人を指差し言う。

「これが精霊よ。

この子はスパク。

雷の低級精霊で、このコンセントの電気を供給してくれてるの」

指差された雷の精霊、スパクは己の存在を誇示するかのようにバチバチと体から電気を発する。

「おお、すげえ」

「他にも色々いるから。

もし興味があるなら本棚に『精霊図鑑』があるから暇な時にでも呼んでみたら？

ありがとうスパク、もう戻っていいよ」

スパクは再びコンセントの中に入った。戻るのを確認した尊は紅連に言った。

「わかった？

あれが精霊。

で、なんだっけ？」

本題から大きく脱線したため尊は会話の内容を忘れたようだ。

「えーと、精霊隊がなんたらかんたらって……」

紅連はすかさずフォローをする。

「あ、そっか。

だからまあ、今は時間が過ぎるのを待つだけだね」

「わかった」

手を軽く挙げ答える紅連。

「もうこんな時間か……」。

明日も学校だから早く寝よつと。

紅連！」

もう11時をまわったことに気づいた尊は紅連を呼ぶ。

「あとはお風呂に入って寝るから、さ、外に出た出た」

追いやるように窓を開けて紅連を出す。

「え、本当に外で寝なきゃダメなのか？」

季節は春といえど、やはりまだ夜は寒い。

「当たり前でしょ。とりあえず早く出てよ」

尊は紅連を外に追い出して鍵をしっかりとかけた。  
紅連はまだガラスをドンドン叩いている。

「ちょっと止めてよ。」

お母さんに聞こえるでしょ。

今日は我慢しておやすみ」

尊は藍色のカーテンを閉め、風呂場に向かった。  
外のくしゃみの音を無視して……

\*\*\*\*\*

朝の木漏れ日がカーテンから部屋に入ってくる。

午前7時、尊は枕元にセットされた目覚まし時計の鳴る前に目を  
覚まし、スイッチを押す。

自然に起きたので最高の目覚めだ。

「うーん、いい朝だあ！」

きつと今日の運勢はいいはずね」

むくりと体を起こし、ベッドから降りる。

一度大きな“のび”をした後、手早く制服に着替えた。

着替え終わると今度は顔を洗うべく、洗面所へ向かう。

洗顔も済ませ、階段を降り、玄関の左のガラス張りドアを開けるとリビングだ。

そしてテーブルに座り、既に用意されていた朝食に手をのばす。

冷めたトーストにイチゴジャムを塗りパクつく。

「お母さんは……もう行ったみたいね」

尊の母は精霊隊で事務をしているため、朝が早い。

父は精霊隊の実務についているため、めったに家にいない。

つまり朝は尊1人なのだ。

そうこうしているうちに用意された朝食を食べ終えた尊は通学用の黒のバッグをとり玄関に向かった。

外に出て鍵を閉め、学校に向かう。

「尊ー！」

どこ行くんだよー!？」

突如頭から降る声。

「あ、紅連。

すっかり忘れてたよ。

今から学校行ってくるから大人しく待っててね」

「えー！」

俺も行くー!」

紅連はそう言うつと2階の屋根から飛び降り、すたつと着地した。尊はその身体能力に目を見開く。

「ダメダメ。」

学校つて所はその生徒しか行けない所だから」

紅連を諭すように言う尊。

「じゃあ姿消して行くから」

いきなりの発言に尊は耳を疑った。

「は？」

すると紅連は怪しげな呪文を発し始める。

「よし、これで大丈夫」

「私には変わった所は無いと思うけど……」

できた、と言う紅連に異変を感じなかった尊。

「あれ？」

ちゃんと成功したはずだけど……」

首をかしげる紅連。

「とりあえず大人しく待ってなさい」

そう言われても納得しない紅連。

「行きたい！」

「ガキか！？」

あんたは。

とりあえずダメだからね！」

食い下がる紅連を叱りつける尊。

「尊、何してんの？」

早く学校行こうよ」

ガミガミと紅連を叱る尊にかかる声。 尊が振り返るとそこには

尊より身長が幾分か低い女子がいた。

尊は女子高生にしては身長が高く、160センチ後半はあるだろう。

それより低いということは、一般平均の身長だということだ。

切れ長の目に形のよい鼻。

漆黒の髪を背中の中ほどまで伸ばしている。

「あ、美奈<sup>みな</sup>。 ちょっと訳ありだね。

こいつに説教してんの」

尊は紅連をあごで差して言う。

すると美奈はこれまた形のよい眉をしかめ、

「何言ってるんのあんた。

誰もいないじゃない。

ほら、寝ぼけてないで早く行くよ」

尊の手をとり歩を進める美奈。  
啞然と引つ張られるままの尊。

「やっぱり見えてなかったんだ」

しっかりと後ろについて来た紅連が呟く。

「どうなってるのよ？」

尊も呟いた。

引つ張られる手を離し、自分で歩を進める尊。

商店街を通り過ぎ、大通りに出た時、トコトコついてきた紅連の表情が険しくなる。

「尊、ちょっと人気のない場所に連れて行ってくれ」

真剣な表情で言う紅連。

「何言って……」

「いいから早く！」

突然のことに訝しみ、原因を知ろうとした尊だが、紅連はそれすら拒否し、尊をいそがせた。

尊はまだ腑に落ちない様子だが、

「わかった……」。

美奈ごめん、先行ってて」

「？ わかった」

尊は美奈と別れ、商店街から少し離れた公園に赴いた。  
夕方は子供でいっぱい公園も今はシンとして静寂を保っている。

「出てこい。」

そんな妖気を垂れ流したらすぐばれるぞ」

公園に着き、周りに人がいないのを確認した紅連は大声で叫んだ。  
静寂に紅連の声がこだまする。

すると並木道に並んだ木の一本から一つの影が飛び出した。

「ヒッ」

事態が呑み込めず呆然としていた尊はいきなり飛び出た影の姿を  
確認すると恐怖の悲鳴をもらした。

小さな体に対し、異様に大きな頭。

ギョロリとした目、尖った耳に突き出た2本の小さな角。

そしてゴツゴツと体に不釣り合いな棍棒を持っている。

だが紅連はそんな異形を見ても臆することなく、逆に鼻で笑う。

「ふん、ただの小鬼か。」

これくらいでわざわざ警戒するんじゃないかった」

すると小鬼はノコギリのするような声を出し、襲いかかってき  
た。

紅連は慌てずに手を前にかざす。

「隴火」



紅連が言葉を発すると同時に手からサッカーボール大の火の玉が放たれた。

放たれた火の玉はまっすぐに小鬼に当たる。当たると同時に火の玉は弾け、後には焦げた地面と小鬼のものとだっと思われる服の切れ端のみが残っている。

「な、なんだったの？  
あれ」

まだショックから立ち直れていないながらも尊は聞く。

「あれは小鬼。  
低級の妖怪だよ。」

この時代にはいないはずだね？」

紅連は尊の恐怖をなくすかのように頭に手を置きながら聞いた。

「あんなの初めてみたわよ……」

「やっぱりか。  
反応からして初めて見たってのはわかったけど……」

紅連は少し考え黙りこむ。

恐怖から立ち直り今の状況を把握した尊は、少し顔を赤らめ、

「もういいよ。  
ありがとう。  
ほんとに初めて見たよ。  
なんであんなのが出てきたんだろ？」

尊も考え込む。

しかしその時かすかにチャイムの音が聞こえてきた。

「え……？」

尊は携帯を見る。

今は8時25分。

登校時間は30分まで。

ここは商店街から歩いて5分の所にある。

以上のことから導き出される答えは……

「ち、遅刻するー！！？」

尊は紅連の手を引き、思いきり走り出した。

## 第2話

深夜、宇治区の郊外にある小さな公園。

閑散とした雰囲気包まれ、遠くからは暴走族と思われるバイクの音が聞こえる。

公園の端に設置されたすべり台やシーソーは丁寧に整備されていることがわかる。

そんな公園の静寂を破るような布を裂く音が響いた。

若干だが大気もふるえる。

公園の真ん中に空間を裂くかのような、否、空間が裂かれ切れ目があった。

切れ目からドサツと倒れてくる1つの影。

影を吐き出した切れ目は再びその独特の音をとどろかせ、閉じた。そして公園は再び静寂に満ちた。

\*\*\*\*\*

京都精霊隊本部

1つの影が漆黒の扉を叩き、中へと入った。

窓から入る光で姿が露わになる。

白い着物を着ていて、体型から女性だということがわかった。

手には何枚かの紙束を抱えている。

だが特徴的なのは顔にかぶった鬼の面だ。

まるで今にも面単体で動きだしそうな雰囲気だ。

その鬼の面は透き通るような声を発した。

「ぬえ」様。

時空に乱れが生じた所に送った小鬼の消滅が昨日確認されました」

部屋は殺風景というよりなにもなく、最奥に大掛かりな机とイスだけがある。

それに座っている人物は逆行でその顔が確認できない。

「そうか。」

ならば、今度は中級を一体送っておけ」

影の声は低く、男だとわかった。

なにもかもを見通すような声だ。

「わかりました。」

後はもう一件、また昨夜、時空に乱れが生じました」

「おそらくは……エスピニスだな」

鬼の面は少し身をふるわしたが、冷静に言った。

「……おそらくは……そうでしょう」

「ふむ。」

そちらはしばらく泳がせておけ。

2人は合流することになるだろう」

だが鬼の面は釈然としない様子で反論した。

「恐れながら、彼らは我らの脅威となりえます。個別に排除した方がよろしいのでは？」

「落ち着け、“夜叉”。

お前はエスピニスに執着しすぎだ。  
今は私の命令に従え」

そう言われた鬼の面、夜叉はなおも食い下がろうとしたが思いとどまる。

そして一礼して部屋を出た。

残ったぬえは天井を仰ぎ、呟く。

「ついに紅連達が来たか。

“あの方”が感づき行動をおこす前に先手をつたなくてはな……」

イスに座っていた影はもう消えていた……

\*\*\*\*\*

精霊学園は大きく分けて2つのコースがある。

具体的に言くと精霊を扱うコースと、供給されたエネルギーで動かされる機械について勉強するコースだ。

尊は精霊コースを選択しており、主に各種精霊学と、英語、歴史を勉強している。

そして今は炎種の精霊学を学んでいる。

精霊学は基本、実技であり、少しの予備知識を学んだ後は様々な精霊との触れ合いにより、扱いを学ぶ。

相変わらず尊にのみ姿の見える紅連は学校についてきて、授業を真剣に聞いていた。

そして何故か紅連は炎の精霊にイヤというほど懐かれている。

いかにも先生といったメガネにスーツの教師はそれを勘違いし、

「皆さん、ご覧ください。」

高神さんは素晴らしいですよ！  
あんなに精霊に懷かれて……」

尊は皆の尊敬の目に対し曖昧に笑みで返すだけだった。

「めずらしいじゃん。」

尊が誉められるなんて……。

あんたどんな仕掛けしたの？」

授業が終わり、真っ先に美奈が話しかけてきた。

「な、なんにもしてないよ？」

たまたまだよ。

たまたま」

だが美奈はまだ納得としていないようだ。

ジト目で続ける。

「あんたいつも寝てるから全然目立たないのになんかいきなりすぎない？」

怪しい……」

尊は返答に困ったため愛想笑いをうかべて、

「ご、ごめん。」

ちよつとトイレ」

それだけ言うと尊は脱兎のごとく教室を飛び出した。

一気に階段を駆け上がり屋上につく。

膝に手をつき息を整えながら紅連の方を向く。

「なんであんたはあんなに炎の精霊に好かれんの？」

紅連も首をひねった。

同じく階段を駆け上ってきたのに息１つきらしてない。

「多分……俺が炎体質だからじゃないかな？」

聞き覚えのない言葉に興味を抱く尊。

「何？」

炎体質って」

「え」と……俺はあんまうまく説明出来ないけど、小鬼を倒した時みたいに炎を操れるんだ、俺」

紅連はポリポリと頬をかきながら言った。

そして最後に、カイがいればなあ、と呟き足す。

「誰？ カイツて」

その呟きを聞き漏らさなかった尊は聞いた。

「ん、俺のパートナーかな？」

いつも２人組で退魔士の依頼をこなしていたんだ。

まあカイは退魔剣士だったんだけど」

尊は納得し、あいまいな呟きをもらす。

すると聞こえる学校に響くチャイム。

「あ、予鈴だ。  
教室戻らなきゃ。  
行くよ、紅連」

尊は紅連を伴い屋上を後にした。

\*\*\*\*\*

宇治区郊外

深夜から次の午後までかけて倒れていた影がむくりと起き上がった。

周囲に人の気配はない。

実は倒れているのを見た保護者達が近付かないようにしているのだが本人は知るよしがなかった。

「俺……は？」

夜叉と戦っていて……どうなったんだ？」

影は優しい男性の声を出した。

まだうつむいているため、確認できるのは金髪だということだけだ。

その時、彼の胸元で何かが光った。

「妖気……！」

西か……」

それだけ呟くと影はその場から消えた。



\*\*\*\*\*

学校が終わり、特にすることのない尊と紅連は家路についていた。尊が前を歩き紅連は辺りにあるもの全てに興味を抱きながら後ろからついてくる。

「すげえ。

動く鉄の塊だあ」

車に感嘆している紅連に尊は呆れたように、

「ちよつと、ありきたりなこと言わないでよ……」

「ありきたり？

……尊」

突如調子を変える紅連の声。

尊は前の一件を思い出し、

「人気のない場所に行けばいいの？」

「ああ。

頼む」

尊はそのまま向きを変え、歩き出した。

公園はこの時間、子連れが多いため避けて、着いたのは学校の裏にある池だ。

そこも普段なら活動しているクラブがあるのだが、今はほとんどのクラブが大会前なので、郊外の施設に出ている。

池はそこまで大きくないが、その周りを木が囲んでいて、まるで

外界から切り離されたようだった。

「早く出てこいよ。」

今度は期待を裏切んなよ」

紅連が言うと同時にガサガサと木をかき分け、それが姿を現した。体長はゆうに2メートルを越えていて、その頭には角が2本ついている。

目は1つしかなく、ギョロギョロとせわしなく動いていた。

赤褐色の肌は筋肉が盛り上がっており、小鬼と同じように棍棒を持っている。

「今度は一つ鬼か……。」

このやり方、おそらくぬえだな」

その化け物、一つ鬼は一声雄叫びをあげると大地を揺るがしながら迫ってきた。

「鬼火」

紅連が呟くと青白い火の玉が一つ鬼を囲った。

一つ鬼は前進を止めて棍棒を振り回し、火の玉を落とそうとする。だが火の玉は意思を持つかのように棍棒をかわし、次々に襲いかかった。

休むことない連続攻撃が一つ鬼に入る。

断末魔の悲鳴をあげ、ついにその巨体は崩れ落ちた。

「ふう。」

結局まだ中級か……」

紅連はため息をつき言った。

その時続いて木をガサガサとかき分けて、影が乱入してきた。

紅連はすぐに身構えるが、影の正体を見て構えをとき、口をぽかんと開けた。

「カ、カイ？」

カイと呼ばれた影はこちらを向く。

透き通るような白い肌。

金髪を腰あたりまで伸ばし、根本を結んでいる。

顔はよっぱど特異な趣味をもつ女性意外はほぼストライクといった顔だ。

優しい目。

筋の通った鼻に、セクシーな口元。

紅連と同じく、薄黄色のマントを羽織っていて、首には六角水晶のネックレスがかけられている。

「紅連……！」

よかった。

1人でどうしようか途方に暮れていたんだ」

声まで優しいげである。

「あえてよかった。

やっぱりカイもこの時代に来ていたんだな」

「ああ……そのようだね。

詳しくはわからないけどどうやら未来に飛ばされたようだね。信じられないけど……そちらの子は？」

ひたすらカイに見とれていた尊はいきなり話をふられ焦る。

「えっと……み、尊です。」

紅連の居候先の主です」

カチンコチンになってしゃべる尊。

「へえ、居候かあ。」

……俺もいいかな？

迷惑かけないし」

「は、はい！」

フカフカのベッドを用意させてもらいます」

緊張で声はふるえていたが、はっきりと答えた。

「尊、俺ん時は外に出ろって……」

紅連はカイへの態度にむくれて言った。

尊は紅連をキッと睨み、

「うるさい！」

切り捨てた。

「ちくしょう。」

なんだこの差は」

紅連は拗ねて地面にのの字を書いている。

そんな紅連と尊を見てカイは少し汗を垂らしながらも、

「とりあえず場所を変えようか。  
いつまでもここにいたってしょうがないし」

池に着いた時はまだ夕日が出ていたが今はすっかり暗くなっていた。

「はい。」

ほら紅連、行くよ」

尊は

「どうせ俺なんて」と言いながら拗ねていた紅連のマントを引っ張って歩き出した。

\*\*\*\*\*

尊の家に着き夕食を終え、いつものように部屋の中央に小さな机を置き、3人は座った。

ちなみに夕食はいくらなんでも3人分は怪しく思われるため、2人分を3人で分けた。

「いやゝ、すっかり忘れてたよ。」

腕章の裏にある携帯食料」

金の装飾が施された腕章の裏には豆粒大の玉が入っていて、それ一つで腹8分くらいになる優れものだ。

紅連はその存在をすっかり忘れていたことが今の台詞からうかがえる。

「あんたが忘れてなきゃ私は卵かけご飯なんて食べなくてよかった

んじゃないの」

紅連の頭を軽くはたく尊。

「ごめんごめん。

ところで何の話だっけ？」

尊が話を聞きたいと言ってここに集まっていた。

尊はまず、2人の年齢を聞いた。

結果としては3人が同じ年だということが判明する。

「昼間言ってた炎体質とかの話。

カイがいれば分かるって言ってたじゃない」

「ああ、そんなことも言ってたな。

カイ、説明してやってくんね？」

紅連はカイを見て言った。

カイは頷いて、

「まずは体質から説明するね。

人はそれぞれ体質があつて、炎、水、雷、土、風の5つの体質の中から1つを生まれながらにして持っているんだ。

その中でも体内に特殊な力……体質と体外に出す力の媒介を持つ限られた人が退魔士になる。

体外に出す力はいくら才能があつてもその力は微々たるもので、退魔士は大抵手に呪符を埋め込んでいるんだけどね。

紅連」

カイがそう言うつと紅連は手の平を尊の前にかざした。

よく見るとつつすらと手のひらに札のようなものが見える。

「この呪符が力が体外にでる瞬間に力を何十倍にもするんだ。で、紅連は炎体質ってわけ。ちなみに俺は雷体質の退魔剣士」

そう言つてカイは腰にあつた剣を顔の高さまで持ち上げた。尊は今までカイの顔に気を取られ、剣の存在など気にしていなかった。

「これにも呪符が埋め込まれてある……」

尊は目を細め、剣を見た。

「退魔剣士の場合はこの剣に力を溜めて相手に斬りつけることで普通の剣撃の何倍も効果を上げることが出来るようになるんだ、わかつた？」

尊は頷き、

「わかつた」

「よかつた。」

……紅連」

カイはニコリと微笑み紅連を見やる。

「どうやってこの時代に飛ばされたのかわからないけど、帰る方法はまだわからないのかい？」

紅連は不思議そうに聞き返した。

「何故帰らなきゃならない？」

今度はカイが目を丸くさせた。

「何言ってるんだ？」

早く帰らないとまた都にも被害が及ぶ可能性が……」

「別にいいじゃねえか。」

こっちにもぬえはいるみたいだし、それに……」

紅連はカイから目を背けた。

「まさか節姫のことを……」

紅連は再びカイに目を合わす。

尊は紅連の目に一瞬悲しみが浮かんだのを見た。

「いいんだ。」

あいつは俺がいない方が幸せになれる。

こんなうだつのあがないない退魔士なんかより、どっかの貴族と一緒にになった方がいいんだ」

その一言一言に悲しみが見え隠れしている。

紅連はそれだけ言々と尊におやすみと言い、窓から屋根に出ていった。

「節姫って……」

尊はカイを見ながら呟く。



「こればかりは俺からは言えない。  
本人が直接言うしかないんだ。

……じゃあおやすみ、尊」

カイは紅連に続いて窓から出ていった。

「なんか複雑そうね。  
はあ」

1人になった尊は誰に言うともなしに呟いた。

\*\*\*\*\*

「節……」

紅連は屋根に寝そべり、満天の星を見上げ、呟いた。

カイは屋根に上がるなり、何も言わずに少し距離を空け、寝転んでいた。

彼なりの優しさを感じながらも紅連の胸中は葛藤で満ちていた。  
その内容は誰にもわからない……。

「俺は……どうしたらいいんだ？」

\*\*\*\*\*

「ほら、行くよ！  
紅連、カイ」

朝、全ての支度を終えた尊は家を出て2人を呼んだ。

昨夜のことは触れないということ、一同暗黙の了解を得たようだ。

「おはよう、尊」

いつものように屋根から飛び下りてくる。

「さて、行きますか！」

「尊〜！」

3件先の家から美奈が飛び出して来た。

美奈はサッカー部のマネージャーをしているため、たまに朝練などで早いことがあるが、大抵は尊と登校している。

ちなみに3才から家族ぐるみで仲が良い。

「おはよう、美奈」

「ふう。」

「行こうか尊」

2人再び歩き出した。

商店街を過ぎ、もうすぐ学校というところで紅連の歩みがピタリと止まった。

尊は声を出さずに怪訝な顔をして紅連を見た。

「カイ……」

紅連は尊の方を見向きもせず、カイを呼ぶ。

「ああ、この妖気……」

2人はそれだけ言うつとすごい勢いで走り出した。  
驚いたのは尊だ。

「え？」

ち、ちよつと？」

尊も走り出す。

「尊！？」

どこ行くの？」

「ごめん！

忘れ物！」

急に走り出した尊を呼び止めた美奈に対して、尊は即興のウソをついた。

### 第3話

京都精霊隊本部

時間は少し遡る。

「中級の消滅が確認されました」

夜叉は扉を開け、入ってくるなりぬえに言い放った。

「そうか……。」

次は私が出よう」

その言葉に夜叉は狼狽を隠さず、

「な、何故？」

本来なら次は上級を送るべき……」

「本来なら……な。

だがあいにくとそんな時間は残されていない。  
一刻も早く遭遇しなければならなくなった」

「ならば私も……」

そう言う夜叉にぬえは有無を言わさぬ口調で言った？

「だめだ。

お前がエスピニスに会うにはまだ時期尚早だ。  
耐えろ、今は」

夜叉は更に何か言おうとしたが、諦め、部屋を去った。

\*\*\*\*\*

「ようやく来たか、紅連」

公園。

小鬼とこの時代に初めて遭遇した場所だ。

辺りに人気は一切なく、ただ公園の真ん中に1人の男がたたずんでいた。

漆黒の衣につつまれた、細い体躯。

紫の髪を肩まで伸ばし、根元でくくられている。  
切れ長の目に整った顔立ち。

そう……

「ぬえ!!」

紅連は吠え、いきなり手をかざし、火を放った。

「隴火！」

「無駄なことを……」

ぬえに向かいまっすぐに飛んだ火の玉は、すんでの所で弾け、消えた。

ぬえが何かした様子はない。

「いきなりの攻撃……」。

変わってないなお前も。

もっともお前は最後に私に会って、そう日が経ってないのだろう

が」

「もう1人いるのを忘れるな」

ぬえの背後からカイの剣が襲いかかる。

公園に入り、カイは紅連を先に行かせ、自分は後から機会をうかがっていたのだ。

「ああ、忘れていないぞ？」

神速とも思えるカイの剣撃はまたもやすんでのところで弾かれた。カイは落ち着いて態勢を整え、退き、紅連の隣まで移動した。

「相変わらず厄介な能力だ。

その妖気の膜は……」

ぬえのまわりには常に妖気による膜が張られていて、その膜を上回る衝撃を与えない限り、ぬえに直接ダメージを与えることはできない。

もっとも攻撃される箇所に意識しないと、効果は発揮されないのだが。

じりじりとぬえの隙を狙っていた2人を見て、ぬえはため息をつき、

「落ち着け、2人とも。

今は争いに来たわけではない」

「信用できるか……！」

紅連はぬえの話を聞こうとしない。

「本当に聞いてくれ。」

今は別の妖魔もいないし、人払いの結界も張っている。  
つまりこの空間には3人しかいない」

ぬえは諭すような口調で言った。

だが紅連は警戒を解かない。

「……ならばそのまま聞いてくれ。」

お前達がこの時代に來たわけと、今起きている事態について……」

この言葉に紅連はようやく警戒を緩める。  
だが目は離さない。

「ふう。」

まずはお前達がこの時代に來た顛末だが、簡単だ。

紅連の力が暴発した結果時空に歪みが出来て、飛ばされたのだ。  
エスピニスはその巻き沿いをくらったようだな」

ぬえの目がカイに移る。

カイも警戒心を隠そうとしていない。

「次に……こちらが本題で來たのだが、今この時代に起こっている  
ことについて、お前達は“がしゃどくろ”という妖魔を知っている  
か？」

紅連とカイは互いを見合い、

「知らないな……」

「まあ知らないだろう。」

お前達が時を越え、100年後に封印が解かれた妖魔だからな。そいつが今は妖魔のボスだ。

率直に言おう、お前達にそれを滅してほしい」

いきなりの提案。

紅連とカイは目を丸くする。

「なんで……だ？」

貴様には妖怪を牛耳ろうという意志はなかったはずだ」

紅連は訝しみ言った。

「がしやどくろは力をつけすぎた。

私は始末出来ない事情があつてな……。

それにがしやどくろを倒さねば元の時代には戻れぬぞ？  
悪い条件ではないのだが……？」

紅連はまだ訝しんでいたが、顔を上げ、言った。

「妖怪を滅することが退魔士の仕事だ。

だから、依存はない」

「そうか……。

だがひとつ、今のお前達では歯が立たない。

“龍火草”が必要だ。

“龍火草”は昔と同じ、中国の奥地にある」

今まで黙って話を聞いていたカイが口を挟んだ。



「待ってくれ。」

夜叉……ミオナは？」

「今も私の下にいる。」

相変わらずの様子だが……」

するとカイは顔を伏せ、

「そうか……」

「……ならば私はここで失礼する」

言葉と共にぬえは消えていた。

「ふう。」

「……くっ」

紅連は一息つくと共に冷や汗が大量に流れてくる。

「ぬえ……。」

あいつも相当力を上げたようだな」

短時間の対峙でかく汗。

ぬえの重圧にあてられたのだろう。

「どうする？」

カイ」

「決まっている。」

ミオナを取り戻し、がしゃどくろを滅する。

まずは中国だな」

カイの決意は固まっているようだ。

「そうだな。

……中国ってなんだ？」

平安時代から来ているため、中国という単語を知らない紅連とカイ。

「尊に聞くしかないな……」

伏し目がちに言うカイ。

「カイ……心配するな。

ミオナは必ず取り戻すんだろ？

“夜叉の呪い”をというて」

「ああ……」

カイはようやく顔をあげた。

「ミオナって誰？」

突如入る尊の声。

気付けば尊は2人のすぐそばに来ていた。

「尊！？」

いつからいた？」

驚く紅連とカイ。

すると尊はきょんととして、

「何言つてんの？」

あんた達が急に走っていったからすぐ追いかけたんでしょ！」

紅連は訝しんだが、1人合点がいった様子で、

「そうか、結界張ってたんだな」

「それよりミオナって……」

尊はカイを目の端でとらえて言った。

「それは……」

「いいよ、紅連。

俺が話す。

夜叉がこの時代にいる以上、接触は避けられないだろうから……」

紅連を遮り、カイが話し出した。

「俺には幼馴染みがいたんだ。

だけどある日夜叉っていう鬼の面の妖怪がミオナに“取り憑いた”んだ。」

これがまた厄介な妖怪だね。

まず取り憑かれた体は使いものにならなくなるまで使われ、その解除方法は1ミリに満たない薄さの面を憑かれた人の顔から斬って剥がすしかないんだ」

尊はカイの話を終始無言で聞いていたが、1つ疑問を持った。

「でもその体ってもう1000年以上経ってるんじゃないの？」

カイは少し考える素振りをしたが、

「夜叉の特殊能力とでもいうのかな？」

憑かれた体は朽ち果てないんだ。

事実、俺が夜叉を斬った時も服はボロボロだったけど、体はしっかりしていたから」

「え？」

夜叉を倒したことあるの？」

尊は目を丸くした。

「いや、まだ夜叉のことを知らなかった俺は体だけを斬ったんだ。だから宿主を失った夜叉は俺への腹いせにミオナに憑いたんだろ  
う……」

カイは再び顔を下げた。

尊はそれを見て慌てて、

「で、でももう夜叉の倒し方分かったんでしょ？」

じゃあ後は会えばその呪いは解くことが出来るんでしょ？」

「ああ、そうだね。

……ところで尊、学校とかいうところには行かなくていいのかい  
？」

「え……」

尊は通学用の藍色のバッグから携帯を取り出した。

「は、8時52分……」

尊は少し固まった後、

「遅刻だあー!!」

慌てて走り出した。

紅連とカイはため息をつき、後を追った。

\*\*\*\*\*

「本当に信用できるのか？」

学校に着いた尊達だったが、当然遅刻だったため、尊は叱られた。そして紅連とカイは昼前の屋上にいた。今は授業中のため、尊はもちろん、他の生徒もいない。

「紅連、ぬえを信用できない気持ちは分かる。

だが今は罷だろうと進まないと、何もできないだろ？」

紅連はぬえの言葉に従うことに抵抗があるようだ。

「わかってるよ。

ただ俺は……」

何が言いかえた紅連を遮りカイは言った。

「紅連……まず聞かせてくれ。  
元の時代に帰る気はあるのか？」

紅連は顔を下げて言った。

「俺は……帰る気はない。

節も、その方が幸せになれるなら」

そう言った紅連の頬にカイの拳がはいつた。

紅連は吹き飛び、殴られた所をおさえる。

「見損なつたぞ！

紅連、お前はそういう奴だったのか！

お前が帰ることを……いや、お前と一緒にいることを誰よりも望んだのは節姫じゃないか！」

紅連は立ち上がり、反論した。

「俺は節を幸せにできない！

節だって俺よりいい男がいることを知っているはずだ！」

「この……。

まあいい。

それがお前の決めた道なら俺はとやかく言うのを止める。

ただ、お前がこの時代で生きるといっても、ぬえの言う“がしやどくろ”を倒すことは避けては通れないぞ」

「……わかつてる。

尊に言つて、中国とやらの道を聞こう」

「……ああ」

\*\*\*\*\*

「中国？」

昼休みが始まり、屋上で弁当を食べている尊。  
ちなみに紅連とカイと話すため1人である。  
玉子焼きをパクリと飲み込み、

「なんでまた中国？」

再度聞き直した。

「いや、ちょっと用事があつてね。  
頼むよ。」

行き方だけ、このとおり」

紅連は手を尊の前で合わし言った。

「ん……」。

今すぐじゃないとだめ？」

「いや、でもできるだけ早く」

尊は少し手を組み考えた。

「んじゃあ、私の精霊に行き方とか教えとくから……。  
まあカイがいるし大丈夫だろうけど」

この言葉に紅連は首をかしげた。

「なんでカイがいれば大丈夫？」

尊は鼻息をして、

「カイは見かけよりずっと大人びてるから！  
紅連、あんたとは違って」

「なるほど」

納得したのはカイだ。  
紅連はがくつと顔を下げた。

「まあ確かに俺よりはしっかりしてるけどさ……」

紅連はいじけだした。

「いじけないの！  
それより中国だったね。  
なんとか今晚中に教えこんどくよ」

「助かるよ、ありがとう」

カイが未だいじけてる紅連にかわり礼を言った。

「どうせ俺なんて……」

\*\*\*\*\*



漆黒の扉を開き、白い着物姿の鬼の面が入った。  
ぬえと机をはさみ対峙する。

「ぬえ様。

首尾は？」

ぬえは両手を机の上にのせ、あごに添えた。

「とりあえず、今の出来事、目的を言った。

あとはあいつらでなんとかするだろう。

それより私はおそらく明日、ここを空ける」

「は？」

戸惑いを隠さない夜叉。

「奴らが中国に行っている間に、一度“光の巫女”と会って成長を  
確かめたいからな」

「……なるほど」

「だから、頼むぞ」

夜叉は少し考える素振りを見せ、頷いてから部屋を去った。

（これはチャンスだ）

夜叉の胸中はさすがのぬえも分からなかった……。

\*\*\*\*\*

「龍火草か……」

深夜、尊の家の屋根。

紅連とカイは寝転び、星を眺めていた。

尊は自分の部屋で精霊に中国への道筋を教えこんでいる。

そして紅連はこの言葉と共に、手を空にかざした。

「龍火草。

禁断の果実。

食べた者は生死の境をさまようが生還した時、絶大な力を得る…

…」

「なんでそんな説明口調？」

カイは突如龍火草の効能について語り出した紅連に汗を垂らし、苦笑いしながら聞いた。

「この方が見てる方にわかりやすいかなと思って」

「……………」

さらに汗の量を増やすカイ。

「まあやってみなきゃわかんねえな！」

紅連はかざした手を握った。  
ようやくカイの汗もひき、

「そうだね。」

当たらないからね」

「おい、それじゃ俺が死ぬみたいな言い方じゃねえか」

カイは苦笑いをした。

「あはは、ごめんごめん」

「つつたく」

紅連はそっぽを向いてごろりと寝返りをうつた。

カイは紅連のそんな様子を見て微笑み、何も言わずに目を閉じた。

\*\*\*\*\*

翌朝。

少し早めに家を出た尊は紅連とカイを呼び寄せた。

「はい。」

これが私が昨日徹夜で中国への道筋を教えた精霊の“ヒオリ”よ。  
ちなみに雷の精霊」

徹夜の部分を強調して言う尊。

そして尊が差し出した手の平の上には、黄色い麦藁帽子とワンピース姿の女の子がちょこんと立っていた。

『よろしくお願いします』

ぺこりと頭を下げるヒオリ。

「へえ」

紅連は手を出しヒオリを受け取ろうとしたが、ヒオリはその手を無視し、カイの肩に飛び移った。

「……………」

目の幅涙を流しながらそのままの態勢で固まる紅連。

「ほ、ほら、カイが雷体質だからでしょ？」

あんただって炎の精霊には懷かれてたじゃん」

尊はまたいじけそうになった紅連に必死にフォローをした。

「そ、そうだよね」

どうやら今度はいじけなかったようだ。

（苦勞するわ…………）

尊は内心冷や汗をたらす。

『では、行きましょう。』

私にドーンと任せてください』

「わかった。

頼りにしてるよ」

カイがそう言うと、ヒオリははにかんだ。

そして尊にいつてきます、と言いき出した。  
尊は笑顔で手を振る。  
だが内心では、

（大丈夫かな？

ヒオリに教えるだけで徹夜したのに。  
なんであの子に教えちゃったんだろ？  
不安だ……）

と、思ってたりする。

「尊。

お待ちせ、学校行こ！」

「うん！」

心配していた尊にかかる美奈の声。

尊は、まあ大丈夫でしょ、と結論づけて学校に向かった。  
だが尊の心配は的中することになる……。

### 第3話（後書き）

えゝ、次回より紅連とカイによる日本巡りの旅が始まります（汗）

ただ次はもう一本を更新する予定なのでこっちの更新は少し先になります。

こんな駄文を待たせるというのも甚だ遺憾ですが、生暖かい目で見守って下さいませ。

## 第4話（前書き）

少し遅くなりました（汗）

## 第4話

紅連とカイが家を出て約3時間。

2人は今岐阜区にいた。

ちなみに尊が教えた中国への道筋には大阪区の国際空港から行くというものだった。

しかし、如何せん2人は道筋を知らないため、ヒオリに付いていくしかなく、順調に目的地と逆の方へ進んでいった。

「ねえ、ヒオリ。

あとどれくらいかかるの？」

すっかり懐かれたカイが聞いた。

ヒオリは少し首をかしげる。

『あと少しです』

「……………そう」

どこで聞いてもその返答しかないヒオリに段々不安になってくる2人。

また少し歩くと小さな街に着いた。

今までも街は何回も通り過ぎたが、ヒオリは人に見えるため、あまり関わらずに過ぎてきた。

閑静とした雰囲気。

辺り一面に田んぼが広がっている。

家は一軒一軒が小さいため、全ての茅葺きの屋根に太陽光が降り注いでいる。

精霊と同盟を組んでから地球の大気は格段によくなった。



その結果今紅連達の前に広がるような街が出来たのだ。  
精霊学園を卒業すると機械工学に進む者、精霊隊に入隊する者、  
色々いる中で農家で自給自足の生活という道も出来たのだ。

「ちゃっちゃと行くよ、紅連」

カイは呆れ顔で、村のいたるものに興味を示している紅連に言った。

今までも街を通る度にいつのまにかどこかに行きそうなことがあった。

紅連は頬を膨らませ、

「いいじゃん、別に。」

急ぐ旅でもないんだし……」

「急ぐ旅なの！」

カイはむくれる紅連をピシャツと抑えた。  
だが紅連はなおも抵抗する。

紅連が、このまま行つて本当に着くの？ とか言っていると幼さ  
の残る女性の声がかかった。

「何をしていらつしゃるんですか？」

紅連とカイとヒオリは声の方を向いた。

そこには紅連の半分ほどの身長をした少女がいた。  
あどけなさの残る顔。

黒い髪を前でパツツンと切り、後髪は腰中ほどまで伸ばしている。  
そんな小学生のような子が首をかしげながら紅連達に話しかけて  
きたのだ。

姿の见えないはずの紅連達に……。  
さすがに紅連達も呆氣にとられていた。

「どうしたんですか？」

再度首をかしげる少女。

ぱっちりした目に潤いが目立っていた。

「え」と……俺達が見えるの？」

いち早く立ち直ったカイが聞いた。

少女はクスツと笑い、

「何を言っていraftしやるんですか。

见えないわけではないじゃないですか。

それより……変わった服装ですね、どこから来たんです？」

紅連とカイは互いに顔を見合わず。

互いに信じられないといった顔だ。

「俺達が見えるのって尊だけじゃなかったんだ」

紅連がつぶやいた。

カイも顔をしかめて同意する。

「どうなさったんですか？」

少女は不思議そうな目で2人を見比べていた。

ヒオリはカイの後ろに隠れながらも少女を興味津々に見つめている。

「あ、ごめんね。」

え〜と……」

「あけは明葉です。」

皆鳥明葉と言います」

カイが詰まった理由を察知して、少女、明葉は名乗った。  
紅連達もつられて挨拶をかえす。

「紅連さんとカイさんですか。  
それとヒオリちゃん」

明葉はヒオリに笑いかけた。

ヒオリはすっかり警戒心をなくして明葉を観察していた。

「明葉ちゃんはこの村の子かい？」

カイが聞いた。

「はい、今から竜神様にお参りにいくところなんです」

紅連は竜神という言葉に反応した。

「竜神？」

「はい。」

この村の雨を降らせてくれる神様です。  
最近は全然雨降らなかったからこうやってお参りに行くんです」

明葉はそう言ってお供え物がかかげた。

紅連とカイは再び顔を見合わせた。

2人の顔には懷疑と興味が入り混じっている。

「竜……ね。」

明葉ちゃん、俺達も一緒に言っていい？」

明葉は一瞬目を丸くさせたが、すぐに笑顔になり、

「はい！」

竜神様もその方が喜んで下さると思います。

村の人たちは竜神様の存在を信じてくれなくて……」

「なんで明葉ちゃんは信じるの？」

紅連は疑問をぶつけた。

「私、竜神様にあつたことがあるんです。

今より小さい時に……」

\*\*\*\*\*

いつの間入ったのだろう。

明葉は森の中に入っていた。

普通の大人なら慌てることもない深さだが、小さな明葉にはまるで永久の迷宮に入ったかのように思われた。

「……どっ？」

迷ったことが把握できない明葉は弱々しい声でつぶやいた。

辺りは静寂を保っていて、時折吹く風が緑の生い茂った樹木を揺らしていた。

明葉はまるで世界から拒絶されたような疎外感を感じ、涙をこぼす。

その時、明葉の頬に涙とは別の水滴が落ちてきた。

葉と葉の間から見える空はすっかり黒に染まり、雨を降らしていた。

やれることなく呆然とその場に立ちながら濡れる明葉。

すると雨の音に混じって風のうなるような音が聞こえてきた。

「ひっ」

その音はまるで人の根源的な恐怖を煽るような音だ。

「何？」

明葉は怯えながらも辺りを見回す。

もう一度うなる音が聞こえたかと思うと、空を見上げる明葉の視界は白に染まった。

蛇のような体躯。

純白の鱗がびっしり生えていて、細長い顔には髭が伸びている。

明葉が我を忘れて見ていると、それはギョロリと黄金色の目をこちらに向けた。

それと同時に明葉の心に声が響く。

『矮小なる存在よ。

我についてくるがよい』

そう言うとその“白の存在”はまるで蛇が地を這うかのような動きで空を移動した。

明葉は必死についていった。  
枝に顔をぶつけようが、転びそうになるうが……。

\*\*\*\*\*

「……というわけで、私は助かったんです」

黙って話を聞いていた紅連達は各々ため息をもらす。  
その表情は信じられないといった風情だ。  
しかし逆に目の前の少女が嘘を言っているとも思えなかった。

「少し話が長くなりましたね。  
行きましよう、竜神様の祠に。  
祠はすぐそこにあります」

くるりと身を翻して歩き出した明葉に紅連達は後をついていった。

\*\*\*\*\*

「うーん、今日は平和だったあ」

夕日も沈みだした時刻。

尊は紅連達がいないので、久しぶりの1人を満喫していた。  
校内はもう部活をしている生徒しかいなく、尊も来週に控えたバレーの大会の助っ人のために軽く練習をしてきた。

体育館から校門に向かう途中はコンクリートの床の廊下を通り、昇降口を出て少しした所にある。

尊はまだ部活をしているサッカー部や野球部などをぼんやり眺めながら校門についた。

「すみません」

校門を出てすぐに声がかかった。

「はい？」

尊が声の方を見やると、1人の黒い衣をまとった男が立っていた。紫の髪を肩まで伸ばし、根元でくくられ、端正な顔立ちをしている。

「あなたが高神さんですか？」

「はい」

尊は何もかもを見透かすかのような声に多少たじろぎながらも答えた。

声の主はその答えを聞いて微笑んだ。

「よかった。」

あなたのお父様にお話があったんですが……家に誰もいなくて、娘さんがここだというので……ちなみに私こっぴつものです」

尊は差し出された名刺を見た。

名刺には“精霊隊京都支部長 縫島”と書かれていた。

尊の目はこれでもかというくらいに開かれる。

（し、支部長……！？

ってことはお父さん達の上司だよね？）

「し、失礼しました。」

父もすぐに帰ると思いますので、どうぞ家にきてください。  
ぬ、ぬえしまさん？」

尊はあまりの事実到我を忘れながらも答えた。

「はい、ぬえしまであつてます」

尊は安堵のため息を漏らしつつ、歩き出した。

\*\*\*\*\*

「着きました、ここが竜神様の祠です」

紅連達がたどり着いたのは森の奥にある洞穴だった。

森は鬱蒼としていたが、その洞穴の周りだけまるで整備されたかのように開けていた。

明葉は躊躇することなく中へ踏み込んで行く。

紅連達もそれに従う。

洞穴の中ははじめとしていて、足場が悪く、容易には進めなかった。

「ここに竜神様が祭られています」

洞穴の奥には竜の頭を模した石像が建っていた。

カイの首から下げられた六角水晶が紫色に発光する。

「……！？ 紅連」

「ああ」

光った水晶を見た途端2人の表情が陰しくなる。



「どうしたんですか？」

それを見た明葉は小首を傾げた。

カイは無理やり表情を作り直し、言う。

「なんでもないよ。

なんでも……ね」

明葉はまだ怪訝な表情をしていたが、気を取り直し、石像の前の台座に持ってきた供物を置いて、紅連達に向き直った。

「ありがとうございました。

本音言つとここまで1人で来るのが怖かったんです」

えへへ、とはにかむ明葉。

「いや、別にいいよ」

「これからどうなさるおつもりですか？」

紅連とカイは顔を見合わせた。

「俺達はもう行くよ。

急ぐ旅なんでね」

紅連は明葉の頭にポンと手を置き言った。

「そうですか……森の抜け方は分かります？」

「ああ、大体分かるから帰っていいよ」

明け葉はまだ釈然としていないようだが、一礼して歩を進めた。

「行くぞ、カイ」

明葉が見えなくなった途端にさっきまでとは打って変わって厳しくなる紅連の表情。

「ああ……ヒオリ、ちょっとここで待っていてくれないか？」

カイの表情も険しい。

「どこへ行くつもりですか？」

そんな2人にかかる幼い声。

そう、明葉だ。

「！？」

明葉ちゃん？

帰ったんじゃない……」

「お2人が何か真剣な表情だったんで引き下がった真似をしただけです」

紅連はかなわないなあ、と苦笑いした。

そして状況を説明する。

「このカイの首から下がってる水晶は……妖気を探知するんだ、かなり正確にね。」

それが今この石像に反応した……ってことは」

紅連はペタペタと石像を探り始めた。

すると首の周りの1枚の鱗を触った時、石像が音を立て、動いた。動いた先には下に降りる階段があった。

明葉は驚いて声も出ないといった感じた。

「やっぱり……」。

さて、明葉ちゃん、頼むからこれ以上は先には進ませないよ。ヒオリと待つといえてくれないか？」

明葉はコクンと頷いた。

紅連はふつと微笑む。

「行くぞ、カイ」

「ああ、ヒオリ、一緒に待っててくれよ」

カイはヒオリを明葉に預け、紅連に続いた。

「紅連、分かてるだろうけど、相手はおそらく中級の龍だ」

「中級？」

紅連が聞き返した途端、カクンとこけそうになったカイ。

「はあ。」

練介様がいなくてよかったね」

紅連は口をとがらした。

「うつせえな。」

なんで親父が出てくるんだよ」

カイは人差し指を立てそんな勢いで説明した。

「いいかい？」

龍にも上、中、下級に分かれていて、主に伝承で出てくる龍は中級の姿なんだ。

ちなみに下級は妖怪に似た姿で、上級は人間の姿をしているんだ」

紅連はきょんとして聞いていた。

「いつ教わったつけ？」

カイはため息をついた。

「養成機関中に習っただろ？」

龍は絶対的な存在だから倒すのは相当難しいよ」

そんな会話をしていると石段は終わり、再び足場の悪い洞窟になった。

だがそれはすぐに終わった。

通路の先には開けた空間になっていた。

地底湖が広がり、その真ん中には白い龍が堂々とぐるを巻いて寝ていた。

「あれが……竜神様か」

紅連は手を口にあて、叫んだ。

「おい、竜神様！」

みんな雨が降らなくて困っているんだ！  
なんとかしてくれよ！」

龍は重々しく首をあげた。

『……馬鹿な奴らだ』

そう声を発した瞬間、紅連とカイの後ろから影が迫った。  
龍はほくそ笑む。

「馬鹿はあんただよ」

紅連達は影がに当たるかと思った瞬間、上に飛び回避した。

『何！？』

紅連とカイは影を見る。  
そこには白とは対照的な黒の龍がいた。

「俺のこの水晶は龍には反応しない。

つてことは龍を支配できる力、つまり“邪龍”しかないからな」

黒い体表。

瞳も黒くまがましいオーラがただよっている。

『くくくつ、ひと思いに樂にしてやろうと思ったが、そういう態度  
なら苦しませて殺してやろう』

黒の瞳が怪しく揺れた。

「ほざくな。

朧火」

紅連のはなつた火の玉は真つ直ぐに邪龍に飛んでいったが、目の前に出された尻尾によって遮断された。

「まだだ。

疾れ稲妻」

カイが剣に手をかざすと剣にバチバチと稲妻がはしった。

カイはひとつ飛びで3階分はあるうかという龍の顔にいき、顔を横に切り裂いた。

邪龍は苦しそうに呻き、尻尾をめちやくちやに振り回した。

次々と洞窟内の岩が破壊される。

紅連は崩れ落ちる岩に飛び移りながら龍の顔の前までたどり着いた。

手をかざし叫ぶ。

「くらいな、業火」

紅連の手から発せられた赤黒い炎はそのまま龍の顔に直撃した。

龍はさらに悶え苦しむ。

だが次の瞬間、紅連のつけた火傷も、カイのつけた斬撃跡も、みるみるうちに回復していった。

「あ、そう。

そう簡単にはやらせてくれねえか。

カイ、“詠唱”にうつる。

時間稼いでくれや」

紅連は体の前で手を合わし、足を肩幅に広げ、言った。  
カイは黙ってうなずく。

「いくぜ。」

“ 総ての風よ、炎に還れ。

総ての水よ、炎に還れ。

総ての土よ、炎に還れ。

総ての稲妻よ、炎に還れ……」

カイは龍が紅連に注意を向かせないように、紅連とは反対側から攻撃した。

案の定、龍の注意はカイに向く。

カイは襲ってきた尻尾を跳んで避け、そのままの勢いで顔まで行く。

だが今度は龍が眼前で噛みついてきた。

「くっ」

カイは間一髪で避け、地面に降り立った。

「電光石火・極！」

カイの姿は一瞬で消え、次の瞬間、龍の頬は切り裂かれていた。  
何度も何度も切り裂かれる龍の顔。

だがそれは圧倒的な回復力で傷は消えていった。

そしてついに龍は紅連の方を向いた。

「炎よ舞え、炎よ暴れよ、総てを飲み込み、喰らい尽くせ」

龍はものすごい勢いで紅連に迫った。

紅連は目を開け、笑い、叫んだ。

「総てを焼き尽くせ！  
ほのめのとむじ  
焰甲！！！！」

激しい爆発音と共に紅連の手から炎が発せられた。  
発せられた炎は龍を包み球状になる。

紅連は右手を前にかざし、握った。

『グキヤアアア！！』

握られた手に呼応するかのように、炎の球は龍を包んだまま小さくなった。

龍の断末魔の悲鳴を残して。

紅連が再び手を開くと、炎もはじけ、後には何も残らなかった。

「ふう」

額にうつすらかいた汗を拭いたため息をつく紅連。

「よくやったよ、紅連」

「なんでそんな上から視線なんだよ」

2人は笑い、拳を合わせた。

『感謝するぞ。』



異彩の力を持つもの達よ』

今度は白い龍が言葉を発した。  
その瞳は先ほどまでとは比べきれないくらい澄んでいる。

「あんたが竜神様か」

紅連がぶつきらばうに聞いた。

『いかにも。』

恥ずかしながら、邪龍に精神を支配されていたようだが』

まるで地の底から語りかけてくるかのような声だ。

「へっ、まあ相手が中級邪龍で助かったよ。

支配されたあんたまで動いたんじゃないやれになんねえからな」

白い龍はふつと微笑んだ。

「そんなことより雨を降らしてくれよ。

みんな困っているから……そうだ、あんた、龍火草っての知っているかい？」

『雨は降らせよう。

龍火草ならここにある』

白い龍が体を動かすとそこには一本の草が生えていた。  
毒々しい紫色に真つ赤な実がついている。

「……マジだ」

紅連もカイも驚いて声も出ない。

『不思議なことではない。』

本来龍火草とは龍が長年育んだ命の源のことだ。  
良いぞ、食べて。

お主達には世話になった』

「ほんとか？

……じゃあ」

紅連は岩を伝い龍の所へ行き、龍火草を掴んだ。  
ごくりと生唾を飲む。

『しかし、本当に良いのか？

下手をすれば死ぬぞ』

それを聞いた紅連は不敵に笑った。

「当たって砕けるが俺の性分なんでね」

「砕けたら死ぬよ、紅連」

端の方でのほほんとつつこむカイ。

紅連は頬をピクツと動かした。

「……じゃあ、行くぞ」

紅連は目を閉じて草を飲み込んだ。  
そのままぱたたと倒れる。

『しばらくはこの状態であろう。』

……………！？』

カイはいきなり言葉を止めた龍をいぶかしんだが、すぐに己の胸元を見て事態を把握した。

『どうやら、招かれざる客のようだな』

カイはすぐに入り口から離れた。  
そして剣を構える。

空洞の空間に足を踏み入れたのは、

「や、夜叉……」

白い着物に鬼の面をかぶった姿。  
腰には黒の鞘の剣を携えている。

「ふふふ、ようやく会えたわね、カイ」

透き通るような声が空間に響いた。

「何をしにきた？」

……………いや、お前、入り口にいた明葉とヒオリはどうした！？」

夜叉は怪しく微笑んだ。

「心配することはないよ。  
ただ眠らせてきただけ」

カイは納得しない様子だ。

「ふふ、本当よ。

ここにはただ1人を殺しにきただけ。

カイ、あなたをね！」

夜叉は一瞬でカイに迫った。

その剣撃をかろうじて受け止めるカイ。

白い龍も攻撃しようと動いが、

「あなたは邪魔。

これと遊んでて」

夜叉は懷から小さな箱を取り出し投げた。

すると、箱は空中ではじけ、中から龍と同じくらいの大きさの物体が音をたて、着地した。

灰色の体表にぎよろりとした目が4つ顔の横についている。

肩から触手が4本生えていて、所々が苔むしていた。

「ふふ、さあカイ。

2人だけの時間を楽しみましょ」

夜叉は怪しく微笑み、剣を振り上げた。

## 第5話

ガキン！！

鋼の触れ合う音が空洞内に響いた。  
幾度となく繰り返される鋼の音。

「紫電・陸」

カイが呟くと、カイの足は電気を帯びた。  
そのまま剣を構えるとカイの姿は消えた。  
夜叉は剣を構え、辺りを警戒する。

フツと夜叉の後ろに姿を現したカイはそのまま剣を夜叉の首筋に  
当てた。

「そんなことをしても私は降参などしないぞ？」

「……………」

カイは無言を保っている。

夜叉はため息をつき、

「…………紫電・陸」

夜叉の姿が消えた。

だがカイは慌てることなく、剣を構え直した。

（…………どうすればいい？）

夜叉に反応するスキを与えずに面を斬るには…………。

やはり、あれしかないか？

考えに気をとられていたカイは夜叉の接近を容易に許した。

「……！？」

反応が遅れたカイは、それでも体を捻らし回避しようとするが、夜叉の剣はカイの足を斬った。

だがカイは体勢を崩しながらも、剣を振るった。

その斬撃によって夜叉の面は少し欠けた。

瞬間、カイの頭に声が響く。

（斬って、カイ。

私はいいから斬って！！）

カイは驚き目を見開いた。

「ふふふ、命綱の足を断たれたな。

さあ、どうする？」

嘲笑うかのような言い方だ。

カイはそれを見無視し、目を閉じた。

「ついに諦めたか」

夜叉は剣を構えた。

するとカイは呟く。

「雷煌……！！」  
いかずちのきまぐれ

カイが消えるのと夜叉の面が割れるのはほぼ同時だった。  
夜叉はのけぞり倒れた。

真つ二つに割れた面はカラカラとむなしげな音をたて、落ちる。  
カイは夜叉の立っていた後ろに再び姿を見せ、倒れた。  
そして面が割れるとその体は光に包まれた。

その後には金髪の可憐な顔付きの女性がいた。  
そして割れた面がどこからか声を発した。

今までのような透き通るような声でなくしゃがれた男の声だ。

「まさか……俺が割られるとはな……まあいい。  
覚えておけ……俺は必ずまたお前のもとに現れる」

それだけ言い残した面は光の粒子となり消えた。

「なんとか……やれたか。  
……くっ」

カイは意識を手放した。

\*\*\*\*\*

そこは丘の上に建った大きな城だった。  
大きな城に似つかわしい大きな庭で3つの影が見えた。  
2つは剣を交わし、1つはそれを眺めている。

「カイよ……そろそろ終わりにしようか」

たつぷりと蓄えたヒゲと深い色をした瞳が印象的な壮年の男がし  
やべった。

対峙した少年はそれにこたえる。

まだあどけなさが残るが、強い意志をこめた瞳と整った顔立ちだ。

「父上はやはり強いですね。」

そろそろ僕にもコツを教えて下さい」

「焦るな、カイよ。」

たゆまぬ訓練と上達する心……それに女性を大切にする気持ちが大切だ。

ミオナ嬢も退屈しているではないか」

いきなり話をふられたもう1つの影、ミオナは少し焦りながらも冷静にかえした。

「だ、大丈夫ですよ。」

見えていても退屈はしません」

（父上の前では猫かぶんだな、ミオナは）

瞬間、ミオナからカイだけに向けて殺気が放たれた。

汗をどばあと流し、固まるカイ。

「いずれにせよ今日は終わりだ、カイ。」

そんな2人を苦笑しつつ見ながらもカイの父上はその場を離れた。笑顔でそれを見送る2人だがその姿が消えた瞬間、一方の顔の笑みが消えた。

もちろん、ミオナである。

カイに歩み寄り胸ぐらを掴む。

「誰が猫かぶってるですってえー!？」



「な、なんで心の声が聞こえたよ」

息も絶え絶えにいうカイ。

「あんたは顔に出るから分かりやすいのよ!」

さらに強まる力。

「す、すいませんでした!」

「ふん、まあいいわ」

力を抜き、カイを離す。

カイは地に手をつき咳き込んだ。

「それより行くわよ」

「どこに?」

ミオナは上目使いに言うカイに一瞬ドキツとしながらも、強気に言う。

「あの部屋よ」

「あの部屋……?」

「秘密の部屋よ」

城には、遊びに来たミオナはおるか住人のカイですら入れない部

屋がある。

2人はそこを秘密の部屋と称し、入ろうと努力している。

「でも、鍵閉まってるぞ？」

するとミオナは得意げに微笑み、鍵束を見せた。

カイは目を見開く。

「どこでそれを？」

ミオナは真顔で一言だけ言った。

「くすねた」

カイは汗を一筋ながした。

「……というわけで行くわよ」

「あつ、待てよミオナ」

城に入り、部屋に行き着いた2人。

鍵を開け、部屋に入ろうとしたがいきなりミオナの動きが止まる。

カイは不思議そうにミオナを見た。

「私はいいわ……。」

さすがに他人の家の秘密の部屋に入るのは気がひけるから」

カイはわざわざ自分のためだけに鍵をくすねたミオナに感動を覚えた。

「ありがとう、ミオナ」

するとミオナの頬に少し赤みがさした。

「う、うるさいわね。」

ただ私は部屋を開けたかっただけよ」

そう言ってミオナはそっぽを向いた。

（ツンデレ……）

カイがそう思った瞬間、ミオナからまた殺気が湧き、胸ぐらをつかまれた。

「何がツンデレよ……！？」

「だから……なんで心の声が……」

「あんた分かりやすいのよ！」

カイは納得できない、と呟く。

しかし今度は意外にも早く、解放された。

「早く行きなさい。」

いつ人が来るかわからないから」

カイは頷いて部屋の中に入った。

部屋には窓がないため暗く、カイは仕方なしに灯りをつけた。すると部屋の中があらわになる。

部屋の中は殺風景だった。

真ん中に大がかりな机が1つあるだけで他には何も無い。

「……？」

カイは不審に思うが、すぐに目は机の上に向かった。  
黒い皮の本が1冊置いてあるのである。

カイはそれを手にとり開いた。

1ページ目から剣技のことが事細かに書かれている。  
内容はそれほど難しくなく、カイはひたすら没頭した。

「ねえ、何があつたの？」

言葉では気にしてないと言ったが、やはり興味はあるようだ。

「ミオナ、来てみ。」

面白いことが書いてあるよ」

ミオナも誘惑に負け部屋に入り、カイの手元の本に集中した。

「ここに書いてあること、実際にやったら無敵になれるよ」

カイは若干興奮気味だ。

ミオナはついていけない、といった顔をして出ようとした。

ミオナは振り向いた途端に凍りつき、恐怖の表情が浮かんた。

カイもミオナが固まった理由を探すために振り向く。

カイの表情も凍りついた。

そこには鬼も泣いて逃げ出すかのような顔をしたカイの父がいた。

「面白い、遊びをしているではないか。  
ぜひ私も混ぜてほしいものだな……」

「ち、ちち父上。」

これは……その」

ここでカイの父ははあ、と溜め息をついた。

「まあ、見てしまったものは仕方がない。

いずれにせよお前が成人したら見せるつもりだったからな。  
カイよ、それが何かわかるか？」

「剣術の奥義書ですか？」

「違う！」

いきなりの大声にカイとミオナはビクツとした。

「それは、剣術の禁忌を示した書だ。

何かを代償にしなければそれにある技は使えん。  
特にそのお前の見ているページの奥義は……」

カイはちらつと自分の開いているページを見た。

そこには“雷煌”と記され、技の出し方が載せられている。

「それは最大の禁忌だ。

１度でもそれをしようものなら、術者は確実に“退魔の力”を失  
うことになる」

カイはごくろ、と生唾を飲み込んだ。

「触れない方がよいものもあるということだ。

……さて、禁を破ったのは事実だ」

「……………」

その迫力にカイは沈黙してしまう。

「わ、私そろそろ帰りますね」

ミオナは言うだけ言って脱兎のごとく逃げ出した。

「……………」

……余談だが、カイはその夜久しぶりに生まれてきたことを後悔した。

\*\*\*\*\*

「ん……………」

カイは目を覚ました。

（退魔の力が感じられないな……………。  
父はやはり本当のことを……………）

カイ目を洞窟の中心へ向けた。

あまり気絶していなかったのだろうか、竜神こと龍と夜叉の放った化け物とはまだにらみ合っていた。

化け物は触手をユラユラさせながら隙を伺っている。

先に仕掛けたのは化け物だった。

触手を伸ばし、鞭のように龍に襲いかかった。

龍は髭を伸ばし、それに対抗した。

化け物は次にその鋭い爪を伸ばし、直接襲いかかってきた。だが龍はそれを予想していたかのように体をくねらし回避した。そのまま体を相手に巻きつけ締めつけた。化け物は苦しそうな声を出す。龍がカツと目を見開くと同時に化け物の体は3つに裂けた。ぼとぼと、と体だったものが地面に落ちる。

「ふん、他愛もない。」

「……………！？」

3つに裂けた体が毒々しい色の泡に包まれた。泡から新たな体が生えてくる。結果、3つに分裂したのだ。

「なんだ？」

「あれは……………」

「ん……………」

カイが驚いていると後ろで呻き声がした。むくりと夜叉だったもの、ミオナが起き上がった。カイは駆け寄り状況も忘れ歓喜する。

「ミオナ！！」

「無事か！？」

ミオナは最初呆けていたが、徐々に目を開いた。

「カイ……………！？」

大きな目が見開き、透き通った声が洞窟内に響いた。  
カイは思わず抱きしめる。

「ミオナ！！」

ミオナはきよんとしている。

「カイ、どうしたの？」

夜叉の記憶がないことが伺える。

「いや、ああ。

そっというば龍は！？」

龍の方を向くと龍は苦戦をしいられていた。  
次々と襲いくる触手に防戦一方のようだ。  
その龍の足下（？）には未だ目を覚まさない紅連がいる。

「紅連……大丈夫なのか？」

すると紅連の体が赤光に包まれた。

龍に対峙していた化け物は一斉に触手を放つ。  
だが放たれた触手は龍に当たる前に赤光によって遮られ、焼かれた。  
た。

「紅連……？」

『龍火草に打ち勝ったか……？』



触手を焼かれた化け物達は低く唸り、互いの体を寄せ合った。  
毒々しい色の泡が再び3体を包む。

泡がなくなると、化け物はいままでより2回りほどデカくなって  
いた。

体は鋼鉄に覆われ、1つしかない目がせわしく動き、肩から触手  
をたゆませている。

化け物はそのがっちりした体を動かし、今までより太くなった触  
手を紅連にぶつけた。

紅連は焦ることなく手を払う。  
すると触手は焼き切れた。

「……………」

紅連は空中を歩くかのように、1歩1歩化け物に近付く。

化け物は何度となく触手を再生させ攻撃させたが、全て紅連に焼  
かれた。

そして化け物の目の前まできた紅連は手をかざし呟いた。

「ほむほむのみにんご炎勅……………！」

紅連の手から龍の形状の炎が2つ出た。

それは雄叫びをあげながら化け物に向かっていく。

振り払おうとした触手はことごとく焼かれた。

そして2体の龍が化け物の場所を通り過ぎた時、化け物の上半身  
はなくなっていた。

腰の部分が軽く焦げている。

そして残った部分は激しい音をたて、前のめりに崩れた。

紅連を纏っていた赤光が徐々に消えていった。

「紅連！」

カイとミオナが駆け寄った。

虚ろな目をしていた紅連だがすぐに光が灯り、

「カイ？」

ミオナも……カイ、やったんだな」

紅連はそう言って力なく笑う。

「紅連……体に異変は？」

「ねえよ。」

むしろ力が溢れてくるぐらいだ」

カイが手を貸し、紅連は立ち上がった。

多少ふらついた紅連をカイとミオナが支える。

『龍火草によって急に上がった自分の力がまだ慣れていないのである。』

直にその症状は治る』

龍の言葉に紅連は己の手を閉じたり開いたりして確認した。

「紅連、明葉ちゃんとヒオリが待ってる。  
早く行こう」

「ああ、そうだな。」

おい、竜神様！

俺達は今行くからなあ！」

紅連は龍に手を振り地上に向かった。

カイとミオナもそれに続く。

そして残された龍は物思いにふけた。

（あの人間……。

いくら龍火草とはいえあそこまで急激に“符力”が上がるとは…。

奴の中の“何か”が龍火草に呼応したのかもしれない）

\*\*\*\*\*

『えー、続いてのニュースは、今人気急上昇中のアイドル、まゆみさんのコンサートを見に来た男性2人が……』

尊が縫島と会い家に来てから、沈黙を埋めるのはニュースの声だけであった。

人気アイドルのコンサートで事故があったことを淡々と話している。尊はあまりの気まずさにオロオロしていた。

「尊さん」

「はい!？」

不意にかけられた声に裏返った返事をしてしまう尊。

「……気まずいですから何か喋りましょう。

まだお父さんが帰ってくるまで時間もあることですし」

縫島はにっこり笑って言った。

思わずドキツとなる尊。

「は、はい！」

えゝとですね……」

この後尊の父が帰ってくるまで話は続いた。

\*\*\*\*\*

「じゃあ明葉ちゃん、また来るね」

洞窟の騒動のあと、出口で眠っていた明葉とヒオリを起こし、今に至る。

「はい、お元気で」

明葉はにっこりと微笑み言った。

「ああ、竜神様も復活したから雨も降り出すと思うよ」

「ありがとうございます。」

気休めでも嬉しいです」

こんどは弱々しく微笑んだ。

「気休めじゃないんだけどな……。」

じゃあ元気で！」

紅連が言っと、カイ、ミオナ、ヒオリもそれに続いた。  
明葉もそれに応えた。

\*\*\*\*\*

「久しぶりに光の巫女にあつたが、元気に育っているじゃないか」

尊の家で縫島……ぬえが喋る。

相手は尊の父だ。

尊は父が帰ってくるとお役御免とばかりに自分の部屋へ引っ込んだ。

柔らかな顔付きをした尊の父がそれに応える。

「ええ、私達の子供ですからね。

それより、本当ですか？

“過去からの救世主”が尊というものは」

「ああ、本当だ。

今は中国に行っているはずだが。

だが今はそつとしておいてくれ。

まだ奴にはバレていないからな……」

「……わかりました」

その時ぬえの携帯が鳴った。

「私だ。

……何？

そうか、それで夜叉の反応は？

……なるほど、わかった」

ぬえは携帯をしまい、盛大に溜め息をついた。

「どうしたのです？」

「いや、私の留守中に夜叉が何故か岐阜区に行つてな。そこに紅連達の反応があつたらしいのだが……。

ともかく、夜叉の反応が消えたらしい。

おそらくは紅連……いや、エスピニスが倒したのであろう」

「その割には困つたようには見えませんね。  
むしろ嬉しそうだ」

ぬえは曖昧に返す。

だが内心ではこの目の前の男の観察力に舌を巻いていた。

（紅連よ……早く強くなれ。

夜叉が消えた以上、そう長くは隠し通せぬぞ）

ぬえは物思いにふけた。

だがそれも数瞬で、すぐに立ち上がった。

「ではこれで失礼するよ。

いきなり押しかけてすまなかつたな」

ぬえはそう言い、扉に手をかけた。

「またいつでも来てくださいね」

階段の上から尊の声がした。  
ぬえは笑い返し扉を閉めた。

## 登場人物紹介（前書き）

一段落ついたので登場人物紹介です。  
ちよこつと次回予告もあります。

## 登場人物紹介

紅連 グレン

身長 177cm

体重 62kg

体質 炎

外見

くつきりとした目鼻立ちでなかなかの男前だが如何せん隣にいつもカイがいるためあまり目立たない。

髪型は赤い髪を襟足は伸ばし、上は少し短め。

性格

楽観主義だがたまに物事を深く考えることも。

そしてなによりいじけやすい。

「いいよいいよ!!」

どうせ俺は目立たねえよ!!」

\*\*\*\*\*

高神尊 タカガミニコト

身長 164cm

体重 ??

体質 ??

外見

くつきりした目が印象的な美少女。  
金髪を肩まで伸ばしている。



性格

物事を冷めた目で見ることが多い。  
だが助っ人を簡単に引き受けるなど、優しい一面もある。

「ややこしいことに巻き込まれた気がするけど……。  
ま、これからよろしく」

\*\*\*\*\*

カイⅡエスピニス

身長 178cm

体重 60kg

体質 雷

外見

とりあえず絶世の美男子と言っても過言ではない。  
金髪を腰半ばまで伸ばし、根元でくくっている。

性格

優しさ溢れる性格。

飛ばし気味の紅連を抑えられる大人な一面も。  
今は退魔士としての力を失っているが……？

「紅連と共に頑張るよ」

\*\*\*\*\*

ぬえ

身長 177cm  
体重 61kg  
体質 ??

外見

切れ長な奥瞼に筋の通った鼻筋。

紫の髪を肩まで伸ばし、根元でくくっている。

性格

全てがベールに包まれている。

性格もあまりはつきりせず、意味深な発言が多い。

「ぬえという単語を辞書で調べると、“得体の知れない者”と出てくるのだよ」

\*\*\*\*\*

ミオナⅡミグロス

身長 168cm  
体重 ??  
体質 水

外見

愛嬌と気品さを持ち合わせた顔。

金髪をカイと同じくらい伸ばしている。

性格

昔は一言でいうとシンデレ。

だが今は……？

「よろしく！」

\*\*\*\*\*

## 次回予告

退魔士としての力を失ったカイ。

そんなカイは意外な場所で働き出して……？

## 第6話

「え、昨日をもつて産休に入られた村山先生のかわりに、クラスの副担任になった先生を紹介します」

朝のSHR。

尊の担任の宮島葵が元気よく言った。  
何故かその童顔はほんのりと赤らんでいる。  
クラスもざわざわとなる。

「では、入っていただきます。  
カイ〓エスピニス先生です！」

尊は机で頭を打った。  
隣の席の美奈がいぶかしんで見る。  
しかしそれも一瞬で、すぐに入ってきたカイを見て黄色い歓声をあげた。

「か、カイ〓エスピニスです。  
担当は英語です」

クラスの雰囲気にな若干引きながらもたんたんと言った。  
尊はぶつけた場所をさすりながらもぼんやり考えていた。

（昨日言ってたのってこのことだったのか……）

\*\*\*\*\*

「ただいまー！」

「うるさい！」

夜、自分の部屋でボーっとしていた尊。

そこへいきなり窓から紅連が声をだしながら入ってきた。

しかし尊も慌てず対処する。

女らしからぬグーの拳で……。

「ただいま、尊」

「おかえりー、カイ。

そちらの方は？」

窓の外に吹っ飛んだ紅連を華麗に無視し、入ってきたカイとミオナ。

尊はミオナを見たことないため、多少戸惑う。  
だが尊はすぐに察した。

「あゝ、ミオナさんだっけ？  
よかったじゃん、カイ」

カイは優しく微笑んだ。

「カイから話は聞いたよ。  
私はミオナミグロスだよ！  
よろしく」

ミオナが自己紹介をした。  
尊もよろしく、と応じる。

『尊、ただいま』

ヒオリがひよこつとカイの肩から顔を出す。

「おかえりヒオリ。」

「ちゃんと案内できたの？」

『……………うん』

目を泳がせ、汗をばたばたかきながら言うヒオリ。  
露骨すぎるヒオリの態度に尊はカイの方を見る。

「まあ、目的は達成したしいいよ」

カイは苦笑しながらも答えた。  
尊も深くは追及しない。

「けど、結構遅かったね」

紅連達が出て行ってもう1週間がたっていた。  
カイはミオナと目配せしてから答えた。

「ちょっと寄り道しててね」

尊はその様子に疑問をもった。

「まあ、明日分かるよ」

カイは意味ありげに言った。

「ねえ、カイ。」

紅連はいいの？

尊に飛ばされてそのままだけど……」

「あ」

見事にカイと尊がハモった。

急いで窓に駆け寄る。

「……………」

案の定紅連はいじけていた。

「なんだよ……もうちょっと歓迎してくれてもいいじゃないか」

\*\*\*\*\*

S H Rが終わった瞬間、生徒（特に女子）に囲まれるカイ。  
ものすごい質問ぜめにあっている。

（……………）

尊は何もせずただボーっと見ているだけだ。  
ふとカイと目が合う。

「み……高神さん。」

少し話したいことがあるからすぐに職員室へ」

すると鋭い視線が尊に集中した。

尊はただ曖昧に笑い返す。

(もうちょっとマシな呼び出し方があったんじゃないの?)

\*\*\*\*\*

#### 京都精霊隊本部

ぬえはその日頭を痛めながら部下の報告を聞いていた。

理由としては部下の要領の悪さと報告内容に問題があったのだ。

夜叉が消滅して側近と呼べる部下がいなくなり、あらゆる部下から報告があったが、要点がわかりにくく、理解するだけで一苦労だったのだ。

そしてようやく理解したと思ったら次はその内容が問題だった。

京都に精霊隊の本部を置く理由は2つある。

1つは京都は妖怪にとって首都と呼べる存在だからだ。

そしてもう1つは京都は妖怪の治安がすこぶる悪いから。

(光の巫女の存在に気づいたか?)

ぬえに出された報告内容。

それは……

“上級と思われる妖怪3体が精霊学園に侵入”

\*\*\*\*\*

「……いうことだったわけね」

職員室に呼び出された尊はパイプ椅子にすわりカイと対峙していた。



「うん。」

実はミオナを助けた時に力を失ってね」

尊の目が見開いた。

そして何か言おうとしたのをカイが遮り続ける。

「そっちの方はなんとかするから心配しないで。

で、いつまでも尊の世話になるわけにはいかないから、働こうとしたんだ。

帰るのが遅れたのはそれが理由だよ」

「はぁ……」

（しかし、教員免許なんてそんなすぐ取れるものなのだろうか……）

あまり釈然としない尊。

そしてふと気付く。

「そつえばカイって私と同年齢だよね？」

「ん？」

ああ、そつえばそうだね」

尊は呆れた。

まさか同じ年齢の教師がいようとは。

「ま、まあ頑張って」

「ああ」

\*\*\*\*\*

尊が教室に帰ると案の定質問ぜめだった。

尊はそれを1つ1つ丁寧にはぐらかしていく。

やがて救いのチャイムになる。

(SHRから一限の間ってこんなに長かったっけ?)

尊はげっそりしていた。

同時に、これは一限終わっても続くな、と漠然と思う。

「尊〱一限終わっても続くからね〱」

隣から美奈が言った。

尊は予想通りの展開にため息をついた。

一限目は英語。

つまり担当はカイである。

カイは静かに教室に入り、教卓についた。

そしてその優しい声で喋り出す。

「え〱、俺……私の初めての授業ですのでまずは軽く自己紹介をしたいと思います。」

ですが普通にするのもつまらないので英語で自己紹介をしたいと思います」

カイはそう言って一度クラス全体を見回し、英語を流暢に話し出した。

(さすがにうまいわ)

尊もカイの話す英語の違和感のなさに多少驚いていた。他の生徒はぼーっとそれを眺めていたり（特に男子）、カイの顔をずーっと眺めていたり（特に女子）していた。

「ありがとう。」

これで私の自己紹介を……終わります」

カイはクラスの異様な雰囲気圧倒されていた。ぼーっとしたり、目を輝かせていたりする生徒に。

（こ、この時代の人は変わってるな）

\*\*\*\*\*

時間は過ぎ、昼休み。

尊はまた屋上で弁当をパクついていた。

その逆にはカイがいる。

昼休みが始まり、またもや生徒に囲まれたカイは一瞬のスキをついて、持ち前の速さでその包囲網を脱出し屋上に来たのだ。

「速さがなくなってよかったですよ」

苦笑いしながらカイが言う。

「まあそのうちおさまるでしょ。もう少しの辛抱だと思うよ」

尊は当事者ではないのでのんきなものだ。カイは軽いため息をついた。

「カイー!!」

いきなりカイの上に何かが降ってきた。  
尊は目を丸くする。

「み、ミオナ!？」

どうしてここに？」

カイは必死に態勢を整えながらも聞く。

「だって、家にいても退屈で、来ちゃった」

（たしか紅連に聞いた話だと、ミオナさんって昔はツンデレだったのよね？

でも今は……）

尊はカイとミオナの様子を玉子をパクつき、目を線のように細くして見ながら思う。

（今は……ただのデレデレ）

その時だった。

カイの首にある六角水晶が光り出す。

いつもと違い、今日は黒のスーツを来ているが、水晶は外さなかったようだ。

ミオナもそれに気付いたのか、カイから離れる。

「これは……大きいのが3体も!？」  
そっぴえば紅連は!？」

「あ」

尊は今朝から紅連がいけないことに気付く。  
ここ一週間紅連がいなかったために、あまり違和感がなかったのだ。

「肝心な時に……！」

ミオナは紅連を探してくれ」

だがミオナは首をたてに振らない。

「イヤ！」

カイは力無くしてるんでしょ！？  
そんな時に3体も相手にだなんて」

カイは目を見開いた。

「お前どうして俺の力がなくなっていることを……？」

「大体分かるよ！」

私を助ける時にそうなったんでしょ！？」

カイは何かを言い返そうとしたが、大きな鳥のような奇声に遮られた。

そして空からは黒の鳥が、屋上の扉からはまだ水の滴っている緑の物体と体中に目がある黄土色の物体が出現した。

カイはその3体に戦慄する。

「“やたがらす”に“百々鬼”に“水神河童”だって！？

全部上級じゃないか……。  
どうしてこんな所に」

すると百々鬼がその液体質の体を蠢かせ、全身の目から黄色い光線が発せられた。

「カイ！ 尊！  
私の後ろに隠れて！！」

ミオナはそう言つと、その露出度の高い服のどこから取り出したのか、剣を構えた。

「おん 穩！」

ミオナがそう言つと、剣の周りに水の膜ができた。  
その膜が光線を遮る。

「カイ！  
今の間に！！」

「分かつた！」

カイは尊を抱きかかえて走り出した。  
出口にいた2匹をかるうじて避け、駆け下りる。

「カイ！  
いいの！？  
ミオナさん1人にして！！」

カイは尊をキツと睨みつけた。

「分かってる！」

とりあえず尊はここから離れるんだ！

それでなんとかして紅連を呼んできてくれ！」

カイは尊を投げるように置き、元来た階段を駆け上った。

「ミオナ……ミオナ！？」

カイがたどり着くとそこには腕から血を流したミオナがいた。

カイはミオナに駆け寄った。

ミオナは弱々しくカイを見る。

「カイ……う、後ろ！」

カイの背に黒い羽が突き刺さる。

カイは一瞬怯むがミオナをかばうようにそのまま立ちふさがった。

「カイ……カイ！」

カイの背に皿が刺さった。

そしてだめ押しとばかりに光線がカイを貫く。

「カイ――！」

ミオナの目に涙が溜まった。

カイは目を虚ろにし、反応しない。

『しょうがない奴だ』

不意に響く声。

ミオナにも聞き覚えのある声だ。

『ククク。』

どうやら俺は冥府にも嫌われたようだな。

そんなことより俺を滅した奴をこんな雑魚にやらせるわけにはいかないからな……！』

カイの体が黒い光に包まれた。

ミオナは目を見開く。

「カイ……？」

光はすぐにはれた。

そしてそこにいたのは……。

「カイ……なの？」

「ああ、ミオナ少し下がっていてくれ」

そこにいたのはカイ。

だがその顔は白と黒の鬼を模した仮面で覆われ、肩から肘にかけても同じ色の鎧で覆われていた。

そして腰から漆黒の刃を抜いた。

次にじわりじわりと妖怪との距離を縮めていく。  
不意にやたがらすが羽を飛ばした。

『無駄だなあ』

カイは剣を一振りした。



たちまち羽は威力を失い、カイにたどり着く前に落ちる。  
次は百々鬼が光線を、河童が皿をそれぞれ発してきた。

『ククク。』

無駄無駄無駄ア！』

カイの一振りにまたもや妖怪の攻撃は威力を失ってカイに届くことはなかった。

さすがの上級妖怪も動揺する。

『ククク。』

クカカカカカ！』

「うるさい！！」

高笑いしだした夜叉。

それをカイが怒鳴って止めさせる。

『なんだと小僧。』

いいのか？

ここで俺が見放すと2人とも死ぬぞ？』

「だがお前は見放せない。

お前は今肉体を求めている。

それも退魔の力がある体を……」

『ククク。』

分かってるじゃないか小僧。  
ならば貴様の力を出せ』

ここでカイは初めて動揺を見せた。

「だが俺にはもう力が……」

夜叉がカイを遮った。

『ククク。』

貴様はそこまで弱くないはずだ。

そして己の体を過小評価している。

さあ、力を出せ小僧。

たとえそれがどれだけ弱くとも俺の力で何百倍にもしてやる』

そこで3体の上級妖怪が気を落ち着け再び攻撃を始めた。

カイは目を閉じ、集中した。

そして攻撃が当たる直前に呟く。

「紫電・陸！」

カイの姿が消えた。

攻撃は標的を失い、後ろの壁を大破させる。

次にカイが現れたのは百々鬼の後ろだ。

百々鬼はその体の全ての目をカイに向けなおした。

だがその体から噴水のように毒々しい色の体液が流れた。

百々鬼は崩れ落ちる。

「次」

カイはボソツとだけ呟くとまた消えた。

そしてミオナの前に現れた。

背後にいたやたがらすと水神河童が崩れ落ちる。

「ふう〜」

カイが安堵のため息をつくと同時に白と黒の鎧は砂のように崩れた。

仮面だけが浮かび、カイの腰あたりに装着される。

『ククク。』

必要な時は俺を呼べ。

いつでも力を貸してやる。

だが忘れるな。

貴様が気を抜いたならばすぐにその体に乗っ取ってやる』

仮面はスツと音もなく消えた。

「か、カイ〜！」

ミオナはパタツと崩れ落ちるようにカイにもたれかかった。

カイはそれを優しく抱きとめる。

するとミオナは潤んだ瞳でカイを見つめる。

（え？ ええええ！？）

カイは戸惑うがそれでもそれに応じようとした。

「カイ！ ミオナさん！

大丈夫……夫」

慌てて入ってきた尊は2人の様子を見て目を点にした。  
そして次に顔を赤らめる。

「カイ！ ミオナ！

……失礼しましたああ！」

同じように急いで入ってきた紅連も2人の様子を見て目を点にし、  
一目散に逃げ出した。

これで慌てたのはカイだ。

「ちょ、尊、紅連！

誤解……誤解だよ！」

尊はまだ固まっていた。

どうやら年相応の経験はあまり積んでいないようだった。

\*\*\*\*\*

「……と、いうわけなんだよ」

学校が終わり、尊の家。

カイはこの顛末を尊と紅連に話した。

「へえ」

目を線のように細めながらハモる尊と紅連。

「信じてくれよ！

ほら、仮面」

カイは仮面を具現化させ見せる。

尊と紅連は、おおすごいすごい、とまたもやハモらせた。

カイは額に手をあて、悩んだ。

「真剣な話、カイそれって大丈夫なの？」

尊がやや深刻な口調で言った。

カイは不思議そうな顔をする。

「だってそれ元々敵なんでしょ？」

そんな力使って大丈夫なのって」

「大丈夫だよ。

たしかにある程度危険はあるかもしれないけど、今はこれが最善の策なんだ」

「そうよ、カイなら大丈夫よ」

尊はミオナのフォローにもあまり釈然としなかったが、妥協があったらしく、今度はその矛先を紅連に向けた。

「で、紅連。

あんたはカイの大変な時にどこで何をしていたのかなあ？」

怒らないから言ってごらん、と鬼の形相で言った。

紅連はウツと詰まったがすぐに気を取り直し、

「お、俺は遊んでいたわけじゃないぞ。

ぬ、ぬえに会っていたんだ」

「会っていたあ！？」

尊、カイ、ミオナの声が重なる。

紅連はまたそれにたじろいだ。

「せ、正確に言うて現れたんだ。

俺は今日……」

\*\*\*\*\*

紅連は途方にくれていた。

何故ならば今日、紅連は寝坊をし、尊に着いて学校に行けなかったのだ。

いつも尊についていくだけで、1週間という空白の期間も手伝い、紅連は学校への道が分からなかった。

実際はすぐ近くにあるのだが……。

「うつゝみんなどこ行ったんだよ……ん？  
これは妖気？」

紅連がそう感じた刹那、

「そう、妖気だ」

紅連の隣に突如ぬえが現れた。

相変わらず黒の衣を纏っている。

紅連はぬえの出現にのけぞったが、すぐに警戒態勢をとる。

「紅連……龍火草に打ち勝ったようだな。

次は恐山だ。

そこで天海に会え。

……それとこの妖気は心配するな。

お前が出張る必要はない」

ぬえはそれだけ言って姿を消した。

\*\*\*\*\*

「……というわけなんだ」

「なるほど。」

じゃあ結界を張ったのもおそらくぬえだな……」

カイは納得した。

今日の出来事のわりに騒ぎがなかったことを不思議に思っていたのだ。

「ところで……」

紅連が遠慮がちに言った。

「尊、次は恐山への行き方を教えてくれないか？」

「いいけど……」

尊はチラッとカイを見る。

「行くのは最低1ヶ月後よ？」

紅連は首をかしげた。

「カイの職業を考えなさいよ。」

それを考えたら絶対夏休みがいいわ」

「なるほど……」

紅連はあまり納得していないようだ。

「ところで、その天海って？」

尊の問いにカイが説明した。

「天海っていうのは、退魔士の集団の副リーダーだよ」

尊はカイの説明に腑に落ちないことがあったらしく、どこで聞いたつけ、と本棚の前に立った。

「あった。」

天海って徳川に仕えていたお坊さんだ」

尊の言葉に紅連とカイは目を合わせた。  
そしてカイが言う。

「多分、偶然だよ」

「てゆうかそんな昔の人が今いるとは思えないけど……。  
まあいずれにしたって会えばわかる話だけだね。  
とりあえずあと1ヶ月くらいは大人しくしてなさい」

尊は子供をあやすように言った。  
しばらくは誰も喋らなかったが、不意にカイが立ち上がる。



「尊、机貸して」

「なんで？」

「明日のテストの答案作らなくちゃいけないから」

尊の顔は真っ青になった。

「マジ？」

明日テスト？

べ、勉強しなくちゃ」

尊はそう言つてカイに机を明け渡し、自分は急いで1階に下りた。

カイは机に座り、何かを書き始める。

ミオナはそれを黙って見ていた。

そして残された紅連はぽつりと呟く。

「大変だなあ、学生って」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3482e/>

---

精霊見聞録

2010年10月14日14時09分発行